様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３７６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０４６６０

研究課題名（和文）生活困難を抱える親の学習主体形成に関する研究- 筑豊の地域実践より-

研究課題名（英文）Learner Identity Formation of Parents Living under Difficult Conditions -from a Local Application in Chikuho-

研究代表者
相戸　晴子（AITO, HARUKO）

宮崎国際大学・教育学部・教授

研究者番号：２０５９８１２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、生活困難を抱えながら乳幼児を育てている親が、地域の子育て支援活動に継続して参加していくことによって、学習主体として形成されている様子を一部とらえることができた。
　研究の方法は、毎月１回行われている「団地子育てサロン」実践の観察調査を行い、参加する親子の3年間の行動を記録し、分析を行った。その結果から、継続して参加した親の中には、多様な他者－他の親子、地域住民、支援者－に出会い、交流し、ともに活動することによって、徐々に自尊感情を向上させ、子ども理解を深め、より多くの子育て文化を獲得し、よりよい子育ての行動変容につながっていることを確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　実証的研究により、生活困難を抱え、乳幼児を育てている親たちが地域の子育て活動に参加することによって、学習主体として形成されていく過程を一定程度とらえることが出来た。
　具体的には、公営団地で子育てしている親とその乳幼児を対象に月１回３年にわたって「団地子育てサロン」調査実践に取り組み、そこに参加する親（子）が、多様な人や文化との出会うことによって、人との関係性や生活文化を豊かにし、子どもの接し方やとらえ方に行動の変容を見ることが出来た。
　生活困難を抱える親の学習主体形成の実証的研究は数少ないことから、そこへアプローチした研究の意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：In this study, we recorded part of the process by which parents raising infants under difficult life conditions were able to become active learners by continuously taking part in local child-care-support activities where various child-rearing methods were shared.
We analyzed the records of parents and children who participated in monthly child-care-support events in a housing complex for three years. The results showed that parents can improve their self-esteems and attitudes toward child-rearing gradually by communicating with a variety of people (other parents, local residents and their supporters) participating in the events.

研究分野：教育学

キーワード：生活困難を抱えた親　地域活動参加　学習主体形成　子育て主体　地域活動主体　学習主体

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）旧産炭地である筑豊地域は、炭鉱閉山から半世紀を過ぎた現在においても地域課題を抱えている。とりわけ、子どもや子育て家庭の貧困や虐待、学力などの教育問題の連鎖が世代を超えて続いており、その連鎖を食い止めるかが筑豊地位の重要な福祉や教育の課題となっている。

（2）筑豊地域の子どもや子育ての課題があらわすエピソードが、筑豊地域の B 市の低所得者層の子育て家庭が多く暮らすA団地（県営住宅20棟、市営住宅4棟）で頻発していることを知った。仕事を退職し、団地の自治会役員を引き受けた住民（現・自治会長）は、怒鳴られて家に入れてもらえなかったり、食事を十分与えられていない幼児の姿に驚いたり、また小学生、中学生、高校生の不登校割合が高く、団地内でたむろしたばこを吸っている中学生に注意したところ、「ニコチン中毒だから(注意しても)手遅れ」と言われ、「小さいころから関わりを持って、声掛け出来る関係をつくらねば大変なことになる」と実感したという。団地自治会で子育て支援を検討していた時、市内の子育て支援 NPO と研究者の立場で参加する自身が出会い、三者主催による調査研究の絡めた子育て支援実践「A団地子育てサロン」を実施することに至った。その1年後、本科研が採択され、本研究を開始した。

２．研究の目的

（1）一つは、生活困難を抱える親の学習主体形成についての研究である。具体的には、親が主体的に参加しやすい「A 団地子育てサロン」活動をつくり、そこに継続して、親子が参加し続けることによって、親がわが子に対するまなざしや目線、子どもや参加者（他の親や支援者）とのふれあいや立ち振る舞い、言葉掛けにどのような行動変容が見られるのかどうか、また、親の子どもの見方や子育て観、他の親や支援者に対する意識にどのような変容が見られるのだろうかなど、親の学習主体形成をあきらかにする研究である。

（2）二つ目は、「A 団地子育てサロン」に親と一緒に参加する幼児たちの育ちにもたらす効果や影響についての研究である。当初の計画では、子どもの効果や影響をとらえることは困難ではないかと考え、親に関わる支援者の専門性についての研究を目的にする計画をたてていたが、1 カ年、2 カ年、3 カ年と研究を進めていく中で、親の主体形成とともに幼児に与える効果や影響が徐々に見えてきたことによって、「A団地子育てサロン」に参加する親の子ども、すなわち地域活動参加が生活困難を抱えた子育て家庭の幼児にもたらす効果や影響をあきらかにすることを二つ目の研究の目的に位置付けた。

３．研究の方法

（1）本研究では、B市A団地を対象に、団地敷地内の集会所を会場に毎月1回の子育て支援事業｛A団地子育てサロン｝を実施し、そこに継続して参加する親の活動参加の様子から親の子育て観や生活行動がどのように変容しているのかをあきらかにするため、プライバシーの保護、調査研究の了解のもと、参与観察やエピソード記録による研究方法を試みた。本調査でとらえた「生活行動」の指標では、一つは活動への参加の有無や参加した時間などの「参加状況」、二つは活動に参加した際の服装や身なり、表情、ふるまい、態度、また一緒に参加した人の存在から見える「参加態度」、三つは、親同士、子ども同士、支援者との関わりなど「人と関わる様子」、四つは、その時々の活動での遊びや食、体験の活動など「活動内容に取り組む様子」、そして五つは、活動中に見られるわが子に対するまなざしや声掛けなどの「わが子への接し方」の五つの指標からとらえた。

（2）「A 団地子育てサロン」に参加する親の子どもの幼児においても、親と同じく、プライバシーの保護、調査研究の保護者への了解をもと、毎月 1 回の活動の参与観察やエピソード記録による研究方法で研究に取り組んだ。

４．研究成果

（1）地域の子育て支援活動「A団地サロン」に参加する親の生活行動の変容

地域の子育て支援活動に参加する親子について記録し、以下の５つの視点から生活行動の変容をとらえることが出来た。

①参加状況からみえた生活行動の変容

「参加状況」については、団地住民や支援者への不信感を持っていた時期「不参加」から、団地役員や「A団地サロン」で出会った子育て仲間、支援者との関係構築によって「客体的参加」に移行し、その後、子どもたちが積極的に活動に参加する姿も後押しして継続して参加する「主体的参加」になり、その後、

開始前の準備や後片付けに取り組む「主体的参画」という参加状況にへの展開という生活行動の変容をみることが出来た。
②参加態度からみえた生活行動の変容
「参加態度」においては、服装や身なりを中心にとらえた。ここでは「A 団地子育てサロン」　の活動参加を通して、支援者や参加者と子どもの身なりを整える自分、また人間関係構築に葛藤している自分を承認や受容してもらえる体験、またわが子の喜ぶ姿に勇気をもらい、それら参加態度の生活行動の変容をみることが出来た。
③人と関わる様子からみえた生活行動の変容
「人と関わる様子」では、母親Nが、主体的参加をし始めた頃から、わが子を抱っこしてもらうことを嫌がらなくなったり、特定の人にしか心を開かなかった傾向の母親 N が、徐々に参加する親子と談笑したり、一緒に過ごすことが出来るなど、特定の人だけではない関係性の広がりや深まりをみることが出来た。また、主体的参画の時期には、活動について一緒に企画立案したり、自分が考えたり疑問に思っていることを支援者に直接訴える行動を起こしたりしていた。
④活動に取り組む様子からみえた生活行動の変容
「活動に取り組む様子」からは、毎月 1 回の活動の中で、例えば、室内遊びとともに水遊びや砂遊びの遊び、また団地外に出掛けて取り組んだ芋ほりなどの体験活動、食の活動、季節の行事、絵本や音楽などの文化活動などに、親として継続して参加していく中で、子どもたちが楽しそうに参加する姿も後押しし、徐々に子どもの生活や文化の意味を理解し、家庭でも遊びや文化を継続させようとする一面をみることが出来た。
⑤参加態度からみえた生活行動の変容
「わが子への接し方」についてでは、活動参加時にわが子に対して、声掛けやまなざしが乏しかった母親 N が、客体的参加から主体的参加への移行の時期に、誕生したばかりの第 3 子の世話をしつつ、第 1 子、第 2 子への目配り、気配りをしたり、支援者に第 1 子、第 3 子を見てもらっている間、第 2 子を肩車して遊んだり、抱き寄せたりたりする関わりをみることが出来た。もちろん、子どもの年齢発達段階で反抗期や人見知りなど、状況に応じて大きな声でなだめるなどの接し方も見られているものの、それも含めて、わが子に対する発達に応じた接し方が出来てきた生活行動の変容をみることが出来た。
以上の結果より、地域の子育て支援活動に乳幼児の親が参加することによって、不参加からはじめの一歩を踏み出した親子は、客体的参加に留まっていた時期に人との出会いや交流といった関わりの広がりや深まりを通して、自身が承認されたり受容されたりしていること実感し主体的参加に移行し、その後、より積極的に活動に参加したり取り組んだりすることにより、親としての子どもの生活や文化の理解、子どもへの関わりに行動変容が見られ、その後、子どもが喜んで活動に参加する姿も後押しになり、活動の主体者としての意識が芽生え、その場に対する問題意識が芽生えたり、その活動の主体的参画者としての生活行動をふるまう生活行動の変容、すなわち、地域参加による他者や活動の出会いとともに、そこでのわが子の反応から学習主体形成している姿をみることが出来た。
しかし、継続参加する親や少なく、検証できた事例の数が少ないという課題がある。だからこそ、親の学習主体形成が困難な場合の分析も必要であることを実感した。今後の研究課題としたい。

（2）「A 団地子育てサロン」への地域活動参加が生活困難を抱えた子育て家庭の幼児にもたらした効果や影響では、以下３つの内容をとらえることができた。
①家の外に幼児行き来できる回路が開いたということ
このA団地においては、規模が大きく、周辺との敷地が道等で区切られ、行政区も団地のみで団地外の人との接点が作りにくく、立地場所も交通の便も悪いことから、ここで暮らす乳幼児親子は、家庭内に留まらざるを得ない状況とともに団地コミュニティ自体が地域や社会から孤立し、さらに地域参加し、学びや出会いに近づきにくい構造に陥っている。そのような中、団地の敷地内に、幼児期の子どもでも自力で通える地域活動をセツルメント的に、地域に誕生させる調査実践を立ち上げることが出来た。そこでは、保護者がやむを得ず同伴できなくても、承認する関係性があれば子どものみの参加も可能となる。閉塞的なコミュニティだからこそ、逆転の発想で顔が見える関係、口コミでつながり、その活動の価値を共有し、活動に参加し続ける関係性を構築することを可能にした。そして、結果的に家から外に回路を開くことが可能となり、「基本的欲求を満たしてくれる人や場」につながることができていた。
②欠乏欲求充足のスタートラインに立てたこと

幼児 A は、地域活動に継続して参加していくことによって、欠乏欲求充足のスタートラインに立つことができたと考える。具体的には、「食の活動」を「生存」のための活動を位置づけ、「生理的欲求」を充足させることを体験させた。具体的には、幼児自らが作って・食べられるメニューや調理のレパートリー、例えば「ラップおにぎり」や「お手軽ピザ」など、家にある材料で、簡単に作れ、しかし最低限の栄養を確保できる、そしておいしいメニューを開発し、幼児たちが喜んで調理し、おいしく食べる活動をこだわって作る取り組みを毎月調査実践に取り入れた。それを作る過程では、ご飯の量と具の相性や、分量の多い少ないのバランスなど、幼児自らが試行錯誤してよりおいしく作るために工夫する姿などもあり、それを応援する活動をして来た結果、その体験が、幼児であっても日常的に作って食べるという営み、結果的に「自立」を支える活動につながっている可能性を見出した。

次に、「安全・安心欲求」の充足の一側面もなされていたと考える。団地に一緒に暮らす自治会長さんを始め、自分たちを楽しませてくれる活動は、幼児Aにとって、家以外の「遊び場」の発見であり、そこで出会う親子や支援者の存在は家族以外で初めて出会った「意味ある人との出会える場」であったと思われる。何度も集会室に行ったり、活動を待ちわびる幼児Aの姿には、そこで安全を実感したり、安心感に包まれていたのではないだろうか。

さらに、幼児Aには「所属と愛の欲求」充足の姿も一部みられていた。幼児Aが日々活動を待ちわびる姿、そして活動日の朝10時に来なければ家を訪問し、起こして参加を呼び掛けられること、また次第に親子から慕われていったことなど、幼児ながらに幼児Aはこの活動を構成する一人であることとともに、愛情を受けていることを実感してことが伺えた。

そして幼児Aの姿から、「承認欲求」も一定程度の充足の様子がみられた。そこには、活動に参加し始めて1年後くらいから、徐々におもちゃを片づけたり、小さい子どもの面倒をみたりする姿の中で、支援者から「ありがとう。助かる。」などのねぎらいの言葉を掛けられ承認される行為の中に、はにかみ喜ぶ姿が多く見られた。その後、朝早くから活動の準備に参加したり、活動後の後片付けに自ら取り組む自ら取り組む行動が見られ、承認欲求が充足され、お手伝いや人に親切にすることが行動変容が見られたのではないかと考えられる。マズローの欲求五段階説では、この後自己実現欲求が続いていくが、本調査でみた幼児Aについては、4段階の欠乏欲求充足が限界である。しかし、その欠乏欲求充足がなされる活動である意味は大きいと考える。

③生活現実の延長上から乳幼児期にふさわしい生活や文化に出会えたこと

本調査実践では、倉橋惣三の言う 「生活を生活で生活へ」という「生活の教育化」の考え方を最大限拡大解釈して大切に実践して来た（倉橋、1953年、p.23）。教育（指導）して理想の生活に近づけていくのではなく、実際生活の「場」や「人」や「価値観」や「行動」の延長線上から多くの体験や気づきという教育をちりばめた実践を目指した。具体的には、この団地で暮らす乳幼児とその家庭の実際生活に即した、「内容」「時間」「言葉」からこだわり進めることを大切に調査実践に取り組んで来た。そこには、最初から、「きちんと」することを強要するのではなく、現状のありのままの生活を受け止め、入口の敷居を下げ、誰もが疎外感を持たずに参加したくなる雰囲気づくりを大切にし、その中に幼児にふさわしいと思われる生活にゆっくり時間を掛け、ちりばめていくという活動である。内容としては、生活について、天候や服装、時間や季節、また活動を通して時間や言葉遣いを意識する場面を多く盛り込んだり、健康、睡眠、食事等の生活にまつわる話を日常的な会話で話題にしたりしていったりした。また絵本の読み聞かせや歌遊びでは、マナーや態度を強要するのではなく、自由に楽しく触れ合うことを大切にして来た。活動を始めた頃に活動に参加した人たちは、子どもたちの聞くマナーや態度の悪さに驚くことも珍しくなかったが、読み聞かせボランティアを行う支援者が、この活動に参加する子どもたちの家庭環境やこれまでの経験の少なさを十分理解し、受け止め、読み聞かせを続けて来たことにより、幼児Aのエピソードにも頻繁に登場するように、ほとんどの子どもたちが、次第にきちんと座って聞く態度に変わり、本に没頭して聞く姿が見られ、そしてその読み聞かせ一緒につくる担い手にもなる姿が見られた。

しかし、幼児Aの研究では、「団地子育てサロン」への地域活動参加がもたらす生存レベルでの効果や影響の一端は見出してきたものの、根本的な幼児Aの育ちの解決につながっていない。ではなぜ3年間の調査実践の取り組みをしてきたにも関わらず、「団地子育てサロン」の接点から、幼児Aやその保護者を他の保育サービスや子育て支援につなぐことが出来なかったのかを考察する。そこには、現場に身を置き、「団地子育てサロン」に参加する様々な親子と過ごしていく中で、団地に暮らす多様な親子の子ども観や子育て観が存在していることに起因している。とりわけ団地固有の親子の価値観、日常生活、人間関係もあり、それぞれが影響を及ぼし合っていることも垣間見てきた。その良し悪しを問題とする以前

に、一般的な子育て支援や家庭教育支援の「ものさし」で支援することが出来ない、そのものさしをあてることによって、団地の親たちの特に子育て困難な状況に陥っている親が、子育てを否定していると疎外感を持つ危険性を孕んでおり、地域参加を後退させること、すなわち生存すら危うくなることを日々痛感してきたからだ。そこには、2 世代に渡って団地で暮らす人（子ども時代、結婚後も団地暮らし。すなわち自分の実家やパートナーの実家も団地に存在するなど）も多く見受けられ、その団地固有の価値観、日常生活、人間関係は多くの時間や経験に基づいて、蓄積された人格形成そのものに大きな影響を与えている。だからこそ、考察で記したささやかな生存レベルの効果や影響を小刻みに積み上げ、太く切れない「回路」にしていくための時間や関係が必要であり、その基盤を確固たるものにしつつ、親子の主体的に生きていくための自立のための支援や介入という段階に進むことが大事ではないかと考え、本研究ではそこまでの成果をとらえようとはしなかった。しかしこのやり方で時間を掛ければ根本的解決に導くことが出来るのかと問われると、その保障はない。生存レベルの小さな効果や影響の積み上げを現在もなお継続しつつ、さらに親子の課題解決に向けて、この調査実践の限界と課題を乗り越えなければならない。

<引用文献>

①浅井春夫、「乳幼児の貧困問題の現実と解決への施策を考えるー人生はじめに確かなスタートができるためにー」、立教大学コミュニティ福祉学会運営委員会事務局『まなびあい(9)』46-57 頁、2016 年。
②小澤浩明、「地域社会での＜階層化秩序＞と『生活困難層』」、久冨善之編、『豊かさの底辺に生きる一学校システムと弱者の再生産』青木書店、1993 年、179－216 頁。
③久冨善之、「階層分化と学校システム」、久冨善之編、『豊かさの底辺に生きる一学校システムと弱者の再生産』青木書店、1993 年、3－15 頁。
④倉橋惣三『幼稚園真諦』 フレーベル館、1953 年。
⑤福島裕敏、「親からみた子どもの教師・学校体験」、長谷川裕編『格差社会における家族の生活・子育て・教育と新たな困難－低所得者集住地域の実態調査から』、旬報社、2014 年、284-323 頁。
⑥Maslow, A. H.1943、 A theory of human motivation. Psychological Review, 50(4), pp.370-396.
⑦村田和子、「公民館職員として関りの実際と子育てネットワーク」、貝塚子育てネットワークの会『うちの子　よその子　みんなの子ー本音の付き合い、だから 20 年続いているー』、ミネルヴァ書房、2009 年、176-189 頁。
⑧山本健慈、「貝塚子育てネット 20 年の歴史的意義」、貝塚子育てネットワークの会『うちの子　よその子　みんなの子ー本音の付き合い、だから 20 年続いているー』、ミネルヴァ書房、2009 年、162-175 頁。
⑨ロジャー・ハート『子どもの参画―コミュニティ作りと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際-』萌文社、2000 年。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 相戸　晴子	４．巻 19
２．論文標題 地域の子育て支援活動に参加する親子の生活行動の変容－低所得者層団地の実践事例より－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 生活体験学習研究	６．最初と最後の頁 41-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 宮嶋　晴子	４．巻 4
２．論文標題 地域活動参加が生活困難を抱えた子育て家庭の幼児にもたらす効果や影響 －公営団地で試みた実践事例をもとに－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 基礎教育保障学研究	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 相戸晴子
２．発表標題 団地子育て支援実践に参加する子どもの行動変容－S君2年間の活動記録より－
３．学会等名 日本子ども社会学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 相戸晴子
２．発表標題 親の生活習慣がもたらす乳幼児の生活課題－公営団地の子育て実践に参加する親子の事例をもとに－
３．学会等名 日本生活体験学習学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 相戸晴子
２．発表標題 生活困難を抱える親の地域参加による学びのプロセス
３．学会等名 日本社会教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 相戸　晴子
２．発表標題 生活困難に直面する子育て家庭の生活意識構造
３．学会等名 日本社会教育学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 相戸　晴子
２．発表標題 生活困窮家庭の子どもが地域活動に参加する可能性-乳幼児期からの地域参加支援実践の事例より-
３．学会等名 基礎教育保障学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 相戸　晴子
２．発表標題 学童期以降の子どもの姿から考える地域の子ども・子育て支援実践の可能性
３．学会等名 日本社会教育学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考